

特集

谷町蛞蝓 第1詩集

『太陽（と私の位置）』

を読む

繊細で優しくて、でも強いんだよ	谷町蛞蝓詩集『太陽（と私の位置）』考	中塚 鞠子	P 1
救済としての死		岡崎弾	P 4
喪失を抱いて歩く	『太陽（と私の位置）』を読んで	川鍋さく	P 5
感想 - 日本的な感覚では本書は読み解けないのだろう		貴田雄介	P 12
おてんとうさまの呪縛		荒川純子	P 15
喪われた愛を探すこと		平居 謙	P 17

繊細で優しくて、でも強いんだよ

谷町蛞蝓詩集『太陽（と私の位置）』考

中塚鞠子

大阪文学学校で逢った頃は、谷町さんは蛞蝓だった。私は蛞蝓さんの詩が好きだった。蛞蝓から蛞蝓に何故なったか、私は考えたものだ。

この詩集を読みながら、気に入った詩篇に付箋を貼っていったら、付箋だらけになってしまった。どれを読んでも心が揺さぶられる。こんな詩集はなかなかない。私は結構きびしく読む。センチメンタルや抒情には流されないはずなのに…である。

詩集の中にお父さんやお母さん、お祖父さんお祖母さんに対する優しい気持ちが沢山書かれている。愛なのだ。いつも愛する人なのだ蛞蝓さんは。

他の人の話きいててもおもんないから
 自分の話もきっとおもんないやろとおもって
 父はいつも黙っているらしい

よく動く女性の口に囲まれて
 千の相槌を打つ日曜日の居酒屋
 私は案外父親似かもしれない

父は水曜日に舌を切除する

(「えん魔様」)

たったこれだけで父の姿が現れてくる。最終連の切り口も潔い。そして

父は一生懸命やってたら誰か見てくれると言った
 私は時々疑いながらそれを頼りにきた

父にその誰かはいたのだろうか

(「見る人」)

リードが触れる舌尖
 大事な大事な舌の感覚
 せっかくセルマーを買ったのに
 シェルブールの雨傘をやりはじめたのに

たった十五分の面会
 退屈やろ、はよかえりと父は言う
 かえるけどまだいたい
 明日には失われる父の舌
 一部か全部か知らないけど
 なくなる

(「天満橋」)

これは小見出し1。父の病室を未だに見上げてしまう天満橋で電車は地下に潜るの「天満橋」の2番目である。サキソフォンだろうか、手術前のお父さんとそれを思う娘の気持がにじみでている。素直で美しい。

「軍艦アパート」は良き昭和の面影を残した建物と人々の姿が、そこに住む祖父母を訪

ねることで懐かしく浮かび上がってくる。失われた風俗がよく書かれている。

「新大阪」で<お父さんはこんなにもにっこり私を見るんだ>ということに気付く。そして<お父さん／お母さん／蝶になって／私は飛んでゆくよ／光へ／暗さから逃れて／憎しみから遠く離れて／ばいばい>と旅立つ。なんと潔い、と思う。

旅立った蛞蝓さんは、ネパールで織物の研究（フィールドワークというのかもしれない）をしているらしい。

II 善き人 を読むと、蛞蝓から蛞蝓になった訳が分かった気がする。

愛は知らぬまに私からとびだしたみたい
もうない ないと育めない
他者の視線を意識して今日も気くばり
愛からではない
愛からではない

（「善人病」）

愛はあなたから決して飛び出したのではない。善人病にかかっているだけだから。私は「ただ」という詩の中のフレーズを読んで泣きそうになった。

だ一つと走っていったら
がばつと受けとめて

そんな風に
ただ愛されたい

（「愛」 ♪ ただ）

あなたの心は愛で一杯なのだ。愛されたいのはあなたが激しく愛しているからだ。<だ一つと走っていったら／がばつと受けとめて>くれる／／そんな風に／ただ愛されたい>この詩集の中で、この表現が一番好きだ。多分この詩集を読んだ人は、みんなこのフレーズがすきだと思う。一番。

お父さんだけでなく、パチンパチンと碁石を打つお祖父さんも、洗濯物を畳みながらこちらを見てにっこり笑ってくれるお祖母さんも、姉妹のように旅行してくれるお母さんも、みんな蛞蝓を愛してくれているのが手に取るようにわかる。傍から見れば羨ましいかぎりなのだ。

あなたが「あとがき」に書いているように、混乱して、泣いて、痛みを抱えていたから、詩が書けたわけで、あなたは詩人の資格充分なのだ。

詩集をパタンと閉じて、表紙のタイトルを見て、はっとした。『太陽（と私の位置）』。

子どもの頃の記憶なのだが、なんと、太陽は<私が家に入るのを確認して沈んでいった>のだ。これはすごい！子どもの頃から太陽を自分に合わせて沈ませている、太陽を支配している、と気がついた。

ガラス細工のような神経を持ちながら、芯の強い人なのだ、と思った。「ばいばい」と旅立っていったのだって、潔い、強い決断力を持っている人だとわかる。

強く生きていける人だと思った。どんな詩人になっていくだろう、と楽しみだ。

さて、私は「生きているけど、死んだような人」ではないけれど、かつて死んだようになったことのある人だから、世の中にはそんな人がいっぱい居るわけで、だからきっと、みんなあなたの詩で励まされることだと思う。

谷町蛸蟪さん、詩集上梓おめでとうございます。

救済としての死

岡崎弾

生きることが苦手な人は、案外、死ぬことは得意だと思う。

谷町さんの詩は、「あとがき」にも書かれているように-読者が詩に何を求めるかは別として-〈生きているけれど、死んだような人〉にこそ読まれるべきものである。

谷町さんは、生きていても手に入らないもの、言葉で定義できないようなものを、自分自身や社会にたいしても、「生」というよりも、むしろ、「死」に見出そうとしている。

小さい頃から現在に至るまでに書き連ねた記憶、詩の言葉から借りれば〈食いしばった生〉が、彼女の静的な詩調のなかに生々しく織り込まれていて、「孤独」や「虚しさ」といったことを鋭敏に感じさせる。とりわけ、『真空』（103p）と『メッセージ』（98p）といった短い詩にその類稀なる筆力が表れていると思う。

ひどい孤独

夜中にとぎれた LINE

最初からしなきゃよかった

ひとり

『真空』には、この短い言葉の連なりから途方もない深い孤独が窺える。行間の空白が詩のなかで効いていて、「ひとり」という言葉がこれほど胸に迫る詩はない。

手に入れたってしょうがない
どうせ変化するから

これもあげる
あれもあげる
目玉も爪も指先も
心臓も
残らずあげる
はいどーぞ

またどこかであおうね

『メッセージ』では、『真空』で表現されているような「孤独」を肯定するような不思議な世界が構築されている。誰かの言葉を待ち侘びている時間の寂しい「私」の存在を軽快に取っ払ってくれるような詩である。言葉は変化するとしても、「私」の存在は変わることはない。体の全部が失われたとしても、「記憶」として、どこかで会うことができる。この詩はそんなことを考えさせてくれる。苦悩や孤独を詩にすることで「生きる」ために-永続的であれ-一時的であれ-世界から「私」を消失させることができるということ。彼女の詩はいつまでも誰かにとっての「救い」となる力がある。

『太陽 〈と私の位置〉』によせて

2025/09/16

喪失を抱いて歩く

『太陽（と私の位置）』を読んで

川鍋さく

この詩集は、様々な〈喪失〉の情景とそれに伴う心の揺らぎを記録保管するための、ス

クラブブックのような役割を持っていると私は思う。〈喪失〉という経験は、詩を書くことに限らず何かしらの作品を創ることや表現活動を行う際の大きな原動力になる場合が多い。創作や表現活動を通して、自分だけでは抱えきれない痛みや苦しみ、悲しみ、怒り、切なさ、愛おしさ、懐かしさ……そういった多くの荷物を、一時的にでも自分の身体から降ろして、言葉や文字や音や色や肉体の動作などに預けることができるからだ。詩を書く理由を問われて、「詩を書くことで救われるから」と答える詩人も多いだろう。物理的には塞ぐことのできない心の傷口を覆うように、ある意味応急処置として詩を書く場合もあるだろう。この詩集の著者もまた、抱えきれない荷物の重さに何とか耐えやり過ごすしかない場面の多くを、詩を書くことでかろうじて救われてきたのではないだろうか。

しかしこの詩集を読んで感じるのは、そういった応急処置の痕跡だけではない。感じた痛みも苦しみも全てひっくり返して、大切な記憶として遺しておきたいものが、この詩集に綴じられているのだと思う。大切に大切に、忘れてしまわないように。いつか忘れてしまっても、思い出せるように。ただ、どれだけ時間が経ったとしても、喪失の記憶は思い出す度に痛みが伴う。それが大切な記憶であればあるほど。

二部構成のこの詩集の第一部。冒頭に置かれた「プール」という詩篇は、痛みを伴いながら自分の深部を見つめようとする様子と、そこから日常を生きる自分に戻っていこうとする瞬間を、見事なグラデーションで表現した作品だと思う。

プール

更衣室で服を脱ぐとき

胸がえぐられるように痛くなる

私を覆う要素が剥がれて

むき出しになる

私はただ一匹の水中生物になって

名前も言葉も忘れて

前に連なる生き物について泳ぐ

すっかり暗くなった陸にあがって

タオルをかけて

あたたかい紅茶を飲む

あたたまった身体に浮かぶ

母のこと 父と姉

雑多な悩み 死

そろそろ服を着ないと

(全文)

第一連「更衣室で服を脱ぐとき／胸がえぐられるように痛くなる／私を覆う要素が剥がれて／むき出しになる」という部分は、詩人が詩を書く際の（とくに自身の内に抱え込んだ感情や痛みを表現しようとする際の）プロセスを言っているようにも読めるし、書いた詩を後から改めて読む際の感覚にも思える。

「あたたまった身体に浮かぶ／母のこと 父と姉／雑多な悩み 死」とあるように、詩集ではこの後、母にまつわる喪失、父や姉にまつわる喪失、友人と思われる「あの子」や、恋人だろうかと推測できる「あなた」にまつわる喪失、思い入れのある場所にまつわる喪失など、様々な喪失が描かれている。

喪失と聞くと、まず死別を思い浮かべる人も多いだろう。しかし、親しい人や物や場所との離別、病気や怪我による身体機能の欠損、記憶が欠けていくことや、例えば甘えたい相手に甘えられなくなることなど、喪失の範囲は広い。生きることは大なり小なり喪失の連続と言うこともできる。

「乗っ取り」という詩篇では、スマホ依存症のようになってしまった母の様子と、そんな母に対する娘の切ない視線が描かれている。本文中に「母をこんなにしたのは私だ／スマホを与えた私だ／なんて思うのも悪い気がして／私は母がかたまっていくのを／ただ眺めることにした」、「お母さん、お母さん／小さい私も一緒になって母を呼ぶけど／聴こえないようだ」という節がある。自分が母を悪いように変えてしまったという罪悪感を見て見ぬふりするようにスルーするのは、大人としての生きる知恵と配慮の一種だろう。一方で、母に自分の方を向いてほしいという純粋な子どもの心も存在する。しかしその声は母に届かない。ちくちくと子どもの「私」の心は小さな傷を受け続けている。「私」は〈母〉でいてくれる母を失ったのだ。

この詩篇の対として、母娘の関係性がうかがえる詩篇がある。それが「台湾」という一篇。

台湾

台湾で私と母は姉妹のよう
ふたりしてきよろきよろ
きよろきよろ
いつもは気の強い母も
私にびたっと寄り添って

子どもみたい

適当に注文した屋台の内臓料理
 普段は絶対ごはんを残さない母が
 「これは食べられへんわ」と呟く

寺の前で花を売る女たち
 くるくる回る線香

市場の大蛇
 真っ白な大蛇

九龍の街角
 花文字に迷いなく家族の名字を選んだ母

夜市の地下街にある
 牡蠣オムレツの店には二回行った
 二回目には
 「こうすればええんやろ？」と
 母は得意げに注文に行ってくれた

母の呼吸の酸素濃度が九十を下回った
 私は記憶を振りかえり
 一つも忘れないようにしている

(全文)

慣れない台湾の地で娘にぴったりとくっつき子どものように不安そうな母。それでも一度勝手が分かれば得意げに注文をしてくれる頼れる母。花文字に迷いなく家族の名字を選ぶ、家族思いの母。母と娘、互いに頼り合い、甘え合い、時にどちらが親でどちらが子どもかと思うような瞬間も、きっと幾つもの思い出の中に存在するのだろう。そんな愛おしい母娘の関係性があったことを思うと、いっそう「乗っ取り」で描かれる母娘の姿が切ない。

最終連に「母の呼吸の酸素濃度が九十を下回った／私は記憶を振りかえり／一つも忘れないようにしている」とある。酸素濃度が90を下回るというのは、一般的に呼吸不全に陥っている状態である。母の身に何が起きたのかについてはこの詩集の中で具体的に触れ

られていないが、おそらく病や事故など命に関わる出来事があったのだろう。そして今まさに、母の酸素濃度が90を下回り、いよいよいつどうなってもおかしくない容体という状況で、「私」は母を看取る覚悟を現実的にしなければならない。「酸素濃度が九十を下回った」という具体的な数値が、その瞬間を鮮烈に記憶しているのだと痛いほど伝わってくる。

父にまつわる喪失については、「天満橋」、「見る人」という二篇に触れておきたい。

詩篇「天満橋」は「父の病室を未だに見上げてしまう天満橋で電車は地下に潜る」という一文で始まる。まず、この一文のみでとても優れた詩として成立すると私は思う。「父の病室を未だに見上げてしまう」というのは、かつて父が入院していた病院の、まさに父が入院していた病室がある階を、時が経った今でもつい見上げてしまうということだろう。この詩篇の中で、父は舌を切除すると書かれている。その手術を経て、父が健在なのか、すでに亡くなったのかは書かれていない。いずれにしても、舌を失うという父本人にとっての大きな身体的かつ精神的喪失、以前のように会話ができなくなるという父子双方にとっての大きな喪失が、確実に存在する。父が舌を失う前と後の世界。その境界線に在るのが、父が入院していた病院のある「天満橋」なのだ。そしてその「天満橋で電車は地下に潜る」。時が経っても父が入院していた病室を見上げてしまう自分は、地下に潜る電車によって過去への想いから強引に遮断され、現在の日常に引き戻される。そして地下に潜るという部分から、父が舌を失った後の世界にある苦しみや辛さについて想像が膨らむ。

「見る人」は実にストレートで痛く心に刺さる一篇だ。

見る人

父は一生懸命やってたら誰か見てくれると言った
私は時々疑いながらそれを頼りにきた

父にその誰かはいたのだろうか

(全文)

大切な誰かが重い障害を背負う姿を目の当たりにしたり、その人の死を見送った経験のある人は、この短い一篇を読み流すことはできないだろう。

喪失体験は、受け取れるはずだった愛を受け取る機会を失うことも意味する場合がある。親や家族、恋人などの他者から受け取れるはずだった愛。自分で自分に与えてあげら

れるはずだった愛。例えば親と死別すれば、そこから先親からの愛を受け取ることは難しい。何かのきっかけで、生前の親の愛情を死別後に受け取ることあるかもしれない。けれども、もうその親から直接、愛を込めた新たな行為や言葉を受け取ることはできない。喪失に傷つき疲れ果てた心と身体では、自分自身に愛情を注ぐことも上手くできない場合が多い。

愛

1 愛

ただ愛がほしい
 他は何もいない
 やさしい愛を
 狂ったように追い求め
 そろそろそれは
 手に入らないとわかってきた
 誰からも罵られず
 安心の毛布にくるまれる赤ん坊だったら
 よかったのに

2 ただ

愛されたい
 ただ愛されたい
 愛されたいな
 愛されたい

 だーっと走っていったら
 がばっと受けとめて

 そんな風に
 ただ愛されたい

(全文)

多くの喪失体験を感情静かに見つめようとする詩群の中で、この「愛」という一篇では語り手の（おそらく著者の）確かな純心が叫ばれており、胸を掴まれた気分になった。

さいごにもう一つ、紹介しておきたい詩篇が「**言葉を探す**」。少し長いが全文引用する。

言葉を探す

あなたの言葉で
 ゆっくりいこうはどう言うの？
 と訊ねるとラクシュミ・ディディは
 あるはずなのに 絶対あるはずなのに
 とちょっと苛立った

途中で合流した青年に
 私たちの言葉で
 ゆっくりいこうってなんだっけ？
 とディディは訊ねた
 青年もなんだっけとしばらく考えこむ
 夕闇の迫る小道を急ぎながら
 あるはずだ あるはずだ
 と二人は言葉を探す

村の大きな道に出たとき
 ラクシュミ・ディディが立ち止まった
 ワタンワタン…
 ワタンワタンじゃなかった？
 そうだ！ ワタンワタンカテイケッ！
 顔を見合わせ二人は大笑いする

ワタンワタンカテイケッ ワタンワタンカテイケッ
 取り戻した言葉を大切に呟きながら夕闇を急ぐ

※ネパールでは一九六〇年代の開発独裁的なパンチャーヤット体制の中で、ネパール語を中核とした国民統合が行なわれ、多くの民族の言語がその影響を受けた。

自分たちの文化や言語を失うことは、アイデンティティの喪失とも言える。とくに独裁的な政治の下で、強制的に使う言語を変えさせられたり、代々受け継いできた文化を継承できなくなるような出来事は、一人一人のアイデンティティが傷つくだけでなく、時代を経て後世にまで影響を及ぼす。この詩篇に登場する「ラクシュミ・ディディ」と「青年」は、ネパールの国民統合が行われた当時の人からすれば、後世の人に当たるのだろう。ふたりにとってはきっと、ネパール語が日常的に使う慣れ親しんだ言語で、自分たちの民族の元々の言語は、親や祖父母などの世代の人から教わったことがある、というくらいの距離感なのかもしれない。「あなたの言葉で／ゆっくりいこうはどう言うの？」と問われ、二人掛かりでもすぐには思い出せないほどに、彼らの日常からは遠く離れ、失われかけている。それでもやがて彼らはその言葉を思い出す。「ワタンワタンカテイケッ」という失いかけていた言葉を、彼らは取り戻す。喪失の先に在るかもしれない、小さいけれど温かい光を感じる。

一度喪失したものは、二度と元には戻らない。この詩篇のように、忘れていた言葉を取り戻すことはできても、その言葉を当たり前で話していた時代が戻るわけではない。ましてや命は戻らないし、喪失によって受けた心の傷というのは、いつか癒えたとしても、傷を負う前の状態には戻らないことの方が多い。喪失の最中に立ち尽くしている人に、「未来はきっと明るいから」というようなことは、周囲が軽々しく言っていていいことではない。一見喪失を乗り越えたように見える人も、何年たっても消えない傷跡をを独りでそっとさすっている時間がある。けれども、生きていれば思わず肩の力が抜けてふふっと笑いがこぼれるような瞬間が、再び訪れるかもしれないから、「ゆっくりいこう」と自分自身に言葉を掛けてあげてほしい。そんなことを思った。

感想

-日本的な感覚では本書は読み解けないのだろう

貴田雄介

表紙からバングラデシュで
日の丸は日の丸でも

日本的な感覚では
本書は読み解けないのだろう

さよならするために詩を書いているのか

さよならだけが人生だという言葉があったが
出会いと別れ
袖振り合うも多生の縁というが
出会いはほんの偶然のような顔をして
別れは残された人々に深い印象を残す

父との別れ

水着は服ではない
それは両生類の皮膚のようなものなのかもしれない
プールから上がる時
魚類から両生類に進化した時代の記憶が蘇る
服を着ることは
社会性を持った人間としての顔をして
共同体に入っていくことなのか

姉との別れ

命を繋ぐことは儚い
雄螳螂が雌螳螂に
食べられてしまうように
人間も
子を産み落とし親となれば
命を繋ぐ生命としての役目は終わりなのかもしれない
あとは余生なのかもしれない
姉と共にいた記憶の中を生きる

川には上流と下流があり
それだけで命の繋がりを彷彿とさせる
あの子は母で
あの子をあの子と呼ぶ母は
母の母である
そして母はまた母の母になっていく

SNS のアカウントが乗っ取られることがあるが

そもそも最初から私たちはスマホに乗っ取られているのだろうか

死んで体を失うと
私という中身を運ぶ乗り物はなくなってしまう
文字という箱に私を入れて
この世界に残していけば
後世の人が
私を見つけてくれるかもしれない
私を好きになってくれるかもしれない
その時、私はその人に何を返せるのだろうか

豆ごはんは普通のごはんよりもちょっと頑張らないと作れない
ちょっと頑張って作る豆ごはんに合わせて
おかずもちょっと豪華になる
そうして家事は重荷になる

軍艦アパートの記憶を作者は書き留める
作者の言葉によってあの頃の軍艦アパートの群像劇が再演される
いつまでも語り継がれていきますように

だんまりの父の舌は運動不足だったのだろうか
一生懸命な父が不遇に見えたのは
私がそれだけしっかりと父を見てきたからなのだろう

髪の毛は肌の先端で
人肌恋しい夜は
母の髪を撫でる
鮭が故郷の川を遡上するように
私が帰る場所は
私が生まれ出た母の元なのだろうか

アイドル、すずめの子、団地の木
歯が抜けるように
この世界から脱落していく命

母と行った台湾旅行
母を記憶する私の記憶が確かなうちは
母は私の中で生きている

別れを意識すると普段よりもじっくり相手の顔を見ることができる

写真を撮るように
残像を残すように

羽化
繭という闇に籠り
光の中へ出ると
重力から解き放たれ
少し光へ近づける

ばいばいは別れの言葉
これまでの私との決別の言葉

おてんとうさまの呪縛

荒川純子

この詩集を、バリューセットを食べながら読んでいたら、作品にマクドナルドが出てきて、谷町さんとの妙なつながりを感じた。マクドナルドはひとりでも、知らない土地でも、海外でも、あの大きな黄色のMをみるだけで味も値段も雰囲気も安心して入れる店だ。しかし、谷町さんの作品は私を安心させなかった。だから、どうして、なぜ、どういうこと？

例えば、家族を心配している一方、「世界中どこに行ってもここに帰ってきたらええやん」（『肌』）と言ってくれる家族に対して「私たちの持ちものではないんだよ」と現実を言い、「善き人になりたい」と言う反面、「悪い人にはこわくてなれない」（『善き人』）という。「さよなら」「もう少し生きよう」「ばいばい」と別れをつけながらも、「明日別の人と焼き肉行くけど／あなたと今日行きたかったな」（『まぼろしの焼肉』）とパワフルな食欲で生きる気まんまんである。渡せない手紙を書いて、愛を欲して、愛を腐らすことをおそれている？

このどっちつかずさがはらはらさせ、余白の多さに不安になる。無言でいること、余計なことは話したくない。長いため息のような空白、だから、どうして、なぜ、どういうこと？

改めて、さらりと読んでみると何事も深く考えていないように思えてきた。家族を心配しているようで、実はあまり考えていないのかもしれない。母になった友人や行き先のわからない山科の友人のことも、ふと思い出ただけかもしれない。愛されたいなあ、食べたいなあ、死ぬときは満足満足と言って死にたいなあ。そんな思いつきを書き留めただけなのかもしれない。それを「詩」としたのは、自分の存在、生きている感触を踏み台として言葉を吐き出しているかのようだ。体育の授業で跳び箱をとぶときに、踏み台は跳び箱に近すぎても離れすぎてもうまく跳べない。この隙間が余白なのだ。多すぎても少なすぎてもうまく読めない。跳ぶ人、読む人が調節して作品に近づいていく。

タイトルにある「太陽」とは自分を正しく生きさせるための基準のようだ。子供のころ、おてんとうさまがみているよ、と言われたことはなかっただろうか。「父は一生懸命やっていたら誰かみているといった」(『見る人』) この誰かは神様や人ではなく、作者にとっては太陽＝おてんとうさまである。

私が好きな作品『夜の家』は、その太陽が沈んだあとの夜に、くたびれて家に帰ってくるその一瞬を切り取った詩である。

「夜には夜になる家がいい／昼のような家はいや」と正しく生きる基準の太陽にみられている昼間以外も正当でいなくてはならない苦痛。活動なのか逢引きなのか、この帰宅にうしろめたさを感じている、正しくないとわかっている、でも止められない…世の中正しいことばかりではない。太陽はまるで保護者のようだ、いや、おてんとうさまなのだから神様か。太陽に背を向けること、太陽から見えない位置をつくる、神様にそむいて夜の住人になる、

太陽なのか。私をはらはらと不安にさせた存在は。「なぜ」は誰かがみているからという監視、「どうして」は常に正しくいなければならないという暗示、「だから」は他の人と同じように生きなさいというすりこみ。自由でありながらどこか自由でなかった。太陽がなければ生きられないし、世の中は正しく生きたほうがいい。でも太陽からの束縛を否定したのだ。家族も大切だけど、自分が疲れていれば困らんなぞ気にせず帰った途端に眠ればいい。飛行機事故が起きたら他の乗客の方も心配だけど自分の友人にまず助かってほしい、公園の野良猫が迷惑と言われても餌を与え続けられればいいし、さびしくなったらスマイル0円のマクドナルドにとびこめばいい。

ただ、自分ではどうしようもないこともある。おてんとうさまの呪縛からのがれて手にした自由は、今後の位置関係をどうするか。昼と夜との位置をうまく調節して、空白をジャンプし続けなければならない。さあ、私の前の跳び箱は何段だろう。安心して跳ぶなら四段くらいだろうか。踏み台を合わせて跳んでみる、いや、もう一度読んでみよう。

喪われた愛を探すこと

平居 謙

谷町蛸蟪『太陽（と私の位置）』の序詩「夢」の中には極めて潔い決意が語られている。虚しさの共感、孤独の解消、そしてさよなら。

夢

いつか詩集になるといいな／食いしばった生がやわらかい本になるといいな／やさしい言葉はなくとも／この虚しさが共感されて／そのときだけは／ひとりじゃなくなるといいな／／それでみんなにさよならできる （全文）

自分の詩が詩集になるというのは、多くの書き手が夢見るところだろう。そしてその先に〈長く読者の心の中に残る〉ことや〈世々名作として語り継がれること〉を願うことも少なくないだろう。しかし、ここで望まれているのは〈そのときだけは／ひとりじゃなくなる〉ことであって、未来永劫を夢見るわけではない。〈共感〉される当の中身が〈むなしさ〉だという構図の中に、谷町蛸蟪の詩観が如実に表れている。そして究極の望みが〈みんなにさよならできる〉ことだという激しいまでの潔さ。

作品中にもあるように〈やさしい言葉〉はここにはない。しかし、型に嵌ったやさしいさや、ありふれた励ましの言葉を読むよりも、一人の書き手の凜とした佇まいを知る方が、電撃を受けた気分になれる。少なくとも筆者自身にとっては遥かに、遥かに。

この詩集の中には、他にも〈虚しい気分〉が多分に現れている。例えば次の「メッセージ」という作品。

メッセージ

手に入れたってしょうがない／どうせ変化するから／／これもあげる／あれもあげる／目玉も爪も指先も／心臓も／残らずあげる／はいどーぞ／／またどこかであおうね （全文）

投げやりとも諦念とも読める言葉が、短い作品にあふれている。目玉をあげれば見えないうし、心臓を与えると生きてゆけない。しかしそんなことは構わない。本人は至って軽く〈はいどーぞ〉という。深刻ぶってはいないが〈虚しい気分〉が詩集の中に漂っている。そして作品の中だけでなく、「あとがき」でも次のように彼女は語っている。（適宜改行箇所には変更を加えた。）

苦しみや痛みは他者と共有したからといって、なくなる。けれども、それを誰かが、それが見知らぬ誰かであったとしても、知ってくれている、あるいは、知ってくれているかも知れない、と想像することは、生きていくうえで、とても大切なことのように思える。生きているけれど、死んだような人に、この詩集を捧げます。(最終部)

表題作にも虚しさの感覚は現れている。

太陽（と私の位置）

ずっと昔

太陽がまだ沈んでいない頃

手をつないで

ピアノの帰り

洗車をいつまでも見た

太陽は家に入るまで

ずっと沈まなくて

私が家に入ったのを確認して

それから沈んだ (全文)

〈ずっと昔〉という語はとても平明、あるいは耳に馴染んでいるため思わず読み飛ばしてしまいがちになるが、これは重要である。第一連には〈ピアノ〉〈洗車〉、第二連にも〈家に入る〉のように、小さな子供たちが夕暮れ近くまで仲良く遊ぶ日常的な詩にも読めるが、実は壮大な物語なのだ。これまで燦然と輝いていた世界が、閉じてゆくこと自体への挽歌。

この挽歌にはしかし、生き抜くためのとても大きなヒントが隠されている。右の詩で、太陽は沈む。しかし太陽に見守られ、送り届けられるかのように〈家に入った〉小さな私は、世界の昏さに気づいてはいない。私はまだ虚しさに犯されておらず、安寧である。〈ずっと昔〉の物語である。太陽によって守られる、虚しさからは自由だった小さい私。太陽と自分との位置さえ正確に探れば、この小さい私のように自分もまた輝くような生に触れることができるのではないか。一人の読者として渴望するような心持ちでこの詩の世界に溶けていった。

かつて谷町の祖父母が住んでいたという軍艦アパートは、昭和初期に建てられた密集住宅で、軍艦のように見えたことからそう呼ばれていた。近くに通天閣が見えた。そんな記憶を復元するかのようには書かれた作品「軍艦アパート I・II」にも、小さな私が登場する。軍艦アパートは小さな私には異世界のようにもあり〈あのところ私と他とのあいだの区別がゆるやかだった。〉（「軍艦アパート I」部分）と彼女は書く。自他の区別がゆるやかであることは、自立至上主義者からは何か言われそうだが、どうやらそこにも一つの鍵がありそうである。混沌と

しており雑多ではあるが、極めて人間の匂いのするそんな場所の記憶。

通天閣の近くのアパートは／トンネルのような入口をくぐると別世界のように現れる。／「ワープ」／五歳の私は密かにそう呟き、お父さんとお母さんの手を握る。／神社もある。お好み焼き屋もある。植木鉢もある。なんでもある。／「おばあちゃんそっくりやねえ」／見知らぬおばさんが顔を近づけて話しかけてくる。／びっくりしてお父さんの後ろに隠れる。／二階にある部屋の玄関には靴がいっぱい。／左側の台所でおばあちゃんがお茶を用意している。／右側の部屋でおじいちゃんが扇子を片手に碁石を並べている。／昼とワンカップ酒と夏の匂い。／おじいちゃんは五歳の私を「さん」づけで呼ぶ。／背筋がびんと伸びる。／玄関先に近所の人に来ては、立ち話をして帰っていく。／賑やかで混沌とした日常が、その一帯に確かに存在した。（「軍艦アパート II」前半部）

後になって、太陽としての軍艦アパートは撤去され、新しい集合住宅に変わる。しかし実際には闇が来たのだ。しかし太陽は〈私が家に入ったのを確認して〉から沈んだのだから、小さな私は巻き込まれることはない。子供の頃、私がまだ虚しさに犯されていなかったころの物語がここにもある。彼女はそれを、太陽の記憶を元に自らの手によってここに復元したのだ。

「乗っ取り」という詩にも、小さい私が現れて、以前のように健康な世界へと母を誘うが、スマホに魅せられてしまった母は耳を貸さない。しかも困った事にスマホは私が教えたのだ。

毎晩ごはんを食べたらスマホ／風呂に入りスマホ／寝室にも最近はもっていく話しかけても答えない／／お母さん、お母さん／小さい私も一緒になって母を呼ぶけど／聴こえないようだ

（「乗っ取り」後半部）

あるべき世界は、小さい私によって取り返されようとする。あるいは守り切るように小さい私を家に送り届けてから闇に沈んだ太陽を、谷町蛸蝸はここでも復元しようと模索している。詩集最後に置かれた「旅」という詩も、筆者は好きだ。

旅

十分この世をあそび尽くしてから／死ぬのよあなたは／／隅々まで見つめて／ああ楽しかった／満足満足と呟いてから／死ぬのよあなたは／／お金なんて全部あげちゃえば？／物はいったん全部捨てて／身ひとつ／／朝へ（全文）

なんと清々しいことか。そしてこの清々しさが、冒頭で述べた虚しさの感覚と同居しているからこそ、詩集『太陽（と私の位置）』（25）は、身を振るように奥深いのだ。

谷町蛸蝸が描く小さい私は、単に幼時を懐かしんで書かれたものではない。小さい頃に自身

を守った太陽を探し、正しい自分の位置を探す、方法論そのものである。すべてが不確実で、曖昧な時代。谷町蛸螭は、太陽と私の位置を探ることで生きようとしている。それは喪われた愛を探すことにも違いないのだと、筆者には思われてならない。

谷町蛸螭『太陽（と私の位置）』（25）。太陽を希う、天性の詩人の記念すべきデビュー詩集である。

（「日本の表情／中国の表情－2020年代現代詩最前線－」国際観光学研究6号 2025年9月 より再掲）